

第 70 回国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクール東京都大会 金賞

東京学芸大学附属国際中等教育学校 2 年

高田 結愛

課題①

本年は SDGs の中間年。あなたが、ユースリーダーとして SDGs 達成に向けた若者の取組を提案するとしたら、どのような提案をするか。

副題

17 番「パートナーシップで目標を達成しよう」が基盤となる社会へ向かって

「SDGs 疲れ」。皆さんはこんな言葉を耳にしたことはありますか？

「また SDGs か」。最近、私のまわりや SNS で、このような反応を示す人がいます。達成期限折り返し地点の今、特に若者の間で「SDGs 疲れ」が広がっているというのです。何故こんなことが起こっているのでしょうか？

17 色のカラフルなロゴは、今やどこへ行っても目に入るほど企業やメディアでさかんに取り上げられ、多くの人に知られることになりました。ですが、ひとつひとつのゴール、あるいは SDGs 自体について、一体どのくらいの人が説明できるのでしょうか。

「SDGs 疲れ」を感じてしまっている人は、その内容に関心を持つ前の段階で、SDGs という名称自体が耳タコ状態になってしまっているのではないのでしょうか。もしかすると、社会貢献を押し付けられているような気持ちを抱いてしまっているのではないのでしょうか。あるいは、どうせ自分一人の力ではどうにもならないと諦めてしまっている人もいるかもしれません。その結果、ジブンゴトとして捉えることなく、問題を深く知ること自体から自分を遠ざけてしまっているのではないかと思います。

私は、小学 4 年生の時にフィリピンの私立校に通ったことがあります。クラスメイトはみんな裕福な家庭の子でしたが、一歩学校の外に出ると、その当時の自分と同世代の子たちが学校へ通わず働き、さらに小さな子どもたちが物乞いをしている、その格差に衝撃を受けました。それ以来、貧困問題に関心を持つようになり、私にもできることはないかと、支援の形を模索してきましたが、あのときの経験がなかったら、もしかしたら今も社会課題に関心を向けることはなかったかもしれません。ゴール達成に向けて若者が行動を起こすには、社会が抱える課題にまずは目を向ける、つまり現状を「知る」きっかけに出会うところから始まるのだと思います。そのために、私は次のようなことを提案したいと思います。

それは、SDGs を前面に押し出しすぎることなく課題解決を目指す土台を作ることです。SDGs と聞くだけで身構えてしまい、それ以上関わることに消極的になってしまう人がいるのだとしたら、とても残念なことです。問題の現状を見た一部の人がだけが支援に力を入れるのではなく、その現状をいかに多くの人に伝え、その人たちを巻き込むかが重要です。そこで私にできることは、ハードルを感

じることなく、若者に社会課題をジブンゴトとして捉えてもらうきっかけづくりだと思うのです。

その取り組みの一つに、「途上国の課題を身近に」をコンセプトに仲間と一緒に立ち上げた、学生ブランドがあります。「遠く離れた国の問題を自分とは無関係だと思うのではなく、自分にもできることがある」そう思ってもらうきっかけづくり—はじめの一歩—として、身近な商品を若者に提供することがミッションです。

私は、ケニアでストリートチルドレンの社会復帰のために働いている方とご縁から、主にケニアへの支援を担当しています。周りにこの話をすると、「でもケニアって、発展した都市ってイメージだけど、まだストリートチルドレンなんているの？」と驚かれます。しかし現状は、急激な経済成長により貧富の差はますます拡大しているのです。紛争、家庭の貧困、親からの虐待…。子どもたちは満足な教育を受けることもできず、そのため職にもつけないという負の連鎖からなかなか抜け出せず、薬物など危険な道に走ってしまうケースも少なくありません。

私たちは、カラフルなアフリカ布「キテンゲ」を再利用したオリジナル商品の開発を行っています。現地で洋服を製作する過程で生まれた余り布を有効活用し、世界で一つだけの雑貨を手作りしています。捨てるはずだったものなので環境にも優しく、商品の売り上げは、ケニアの子たちの職業訓練に役立てられます。アクセサリーやスマホストラップなど、同世代の人々が手に取ってくれそうな商品を開発することで、現地の現状を伝えるきっかけになればと思っています。

「2030 アジェンダ」には、地球レベルで取り組みを促進するとあります。ゴールを達成するためには、国や企業だけでなく、私たち一人ひとりが無理なくできることに取り組んでいくことが大切です。スモールステップでも、人々が様々な力を持ち寄り協力し合えば、やがて大きな結果となるはずです。

まずは「知る」ところから…。

私はユースリーダーとして、若者たちが身構えることなく、自然に社会課題をジブンゴトとしてとらえることで大きなパワーが生まれることを信じて、そのためのきっかけ作りに取り組んでいきたいと考えています。

ご清聴ありがとうございます。